

# 核戦力を厳戒態勢に移行させたプーチン露大統領は「核のボタン」を押すつもりか



木村 正人  
在英国際ジャーナリスト

ウクライナにロシア軍を全面侵攻させたウラジーミル・プーチン露大統領は2月27日、核戦力を「特別警戒態勢」に移行させるよう命じた。命令を受けたセルゲイ・ショイグ国防相もヴァレリー・ゲラシモフ軍参謀総長も一瞬たじろぐ様子がテレビに映し出された。ジョー・バイデン米政権はエスカレーションではなくデスカレーションに努めたが、誰にも止められなくなったプーチン氏は本当に「核のボタン」を押すつもりなのか。

「プーチン氏の核兵器に関する決定はこれまでの人生で耳にした最も恐ろしい話だった。ウクライナだけでなく、全世界を恐怖に陥れる恐れがある。彼はいつか、何をしようと考えているのか、どのような反応をするつもりなのか。彼に世界を破壊する用意があるのだろうか。21世紀というのに大国の指導者がこのように世界を脅かすなんて信じられない。本当にショックを受けている」

翌28日、ロンドンのウクライナ・カトリック大聖堂で開かれた記者会見で筆者の質問に答えた在英ウクライナ女性組織のイリーナ・テレツカ会長は声を震わせた。第二次世界大戦中と大戦後に3万4000～3万6000人のウクライナ人が英国に移住した。現在、英国

のウクライナ系移民コミュニティは約10万人。すでに約50人の信者がこの大聖堂で司教の祈りを受け、安全なロンドンを離れてロシア軍と戦うため祖国に向かったという。

「プーチン氏にそれ（ウクライナ侵攻や核の脅し）は悪いことだと言える人がいない。恐ろしいことだ。欧州をはじめ全世界が平和を守るため努力しているが、ことごとく失敗している。誰もが平和のための話し合いを求めている。戦争を望む人はいない。しかし平和が、プーチン氏の言うようにウクライナがすべての武器を捨て非武装化地帯になることを意味するなら、それは平和ではない、隷属だ。絶対に応じられない」

## 英国防相「西側は核抑止力を準備万端にしている」

今のプーチン氏に「まさか」は通じない。まさかのクリミア併合に続くウクライナ全面侵攻。プーチン氏の動きに合わせ米軍も核戦力を厳戒態勢に置くこともできたが、バイデン米大統領はデスカレーションを選んだ。米国のリンダ・トマス＝グリーンフィールド国連大使は「ロシアは脅威下にはない。世界を脅すエスカ

レートされた不必要なステップだ」と核兵器に関する危険なレトリックをトーンダウンさせるようプーチン氏を諷めた。

一方、ベン・ウォレス英国防相は「英国の核兵器の態勢は非常に高い状態に保たれている。こうしたフレーズをメディアに広げ、ウクライナでのトラブルから目をそらそうとしている。最近のプーチン氏は非合理的な行動を多くとっており、何をするかしないかについて推測するつもりはない。だからこそ西側は核抑止力を準備万端にしている」と英メ



在英ウクライナ女性組織のイリーナ・テレツカ会長（左、筆者撮影）

ディアに語った。英国は戦略ミサイル原子力潜水艦 4 隻を有し、常時 1 隻が哨戒している。

1962年秋、ソ連がキューバに攻撃用ミサイルを設置、ジョン・F・ケネディ米大統領はミサイルがさらに搬入されるのを防ぐためキューバの海上封鎖を実施した。米ソは軍事衝突のリスクに直面し、世界は核戦争の瀬戸際まで追いやられた。米国はキューバへ侵攻しないことを条件にソ連がミサイルを撤去することに同意し、1 週間にわたる危機は去った。当時、ケネディがとった瀬戸際作戦を今プーチン氏が弄ぶ。

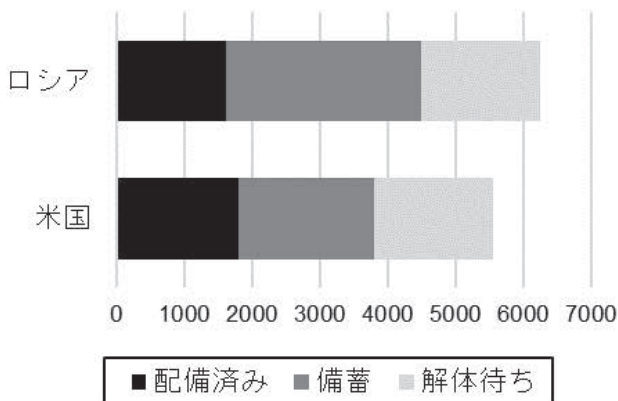
ソ連崩壊に伴い独立したウクライナに米英露は94年のブダペスト覚書で安全保障を約束した。ウクライナは「領土からすべての核兵器を排除する」と誓い、3 カ国は「ウクライナの領土保全ないし政治的独立に対して脅威を及ぼしたり、武力を行使したりしない」と再確認した。ウクライナはロシアにすべての核兵器を返したが、プーチン氏は「ウクライナは独自の核兵器を作るつもりだ」と根も葉もない陰謀論を展開している。

## 核専門家「もし本当に核兵器を使うつもりなら公表しない」

ストックホルム国際平和研究所（SIPRI）によると、昨年 1 月時点の保有核弾頭数は米国5550発（19年より250発減）、ロシア6255発（同120発減）の二大超大国に、中国350発（同30発増）、フランス290発（同）、英国225発（同10発増）、パキスタン165発（同 5 発増）、インド156発（同 6 発増）、イスラエル90発（同）、北朝鮮40～50発（同10発増）と続く。米露は古い核弾頭の解体を進めるが、他の国は核を増強している。

ロシアの内訳は約2585発が攻撃用の戦略核弾頭で、

米露の保有核弾頭数（2021年1月）



出所：SIPRI データより筆者作成

このうち約1625発が陸上・海上弾道ミサイルと爆撃機基地に配備されている。推定1760発の退役核弾頭が解体待ちの状態だ。20年 6 月、プーチン氏は「核抑止力に関する国家政策の基本原則」の更新を承認し、国家の存立が危機に瀕している場合には通常兵器の使用に対しても報復のため核兵器を使用できる条件を明確にしている。

ロシアが通常戦争に負けそうだと判断した場合に非戦略核兵器の先制使用へとエスカレートすることを抑止するため、米国は20年に大西洋と太平洋の戦略ミサイル原子力潜水艦への低威力核弾頭の配備を終えている。低威力核弾頭は「使える核兵器」と言われる。長年、核拡散防止に取り組んできた英有力シンクタンク、国際戦略研究所（IISS）のアソシエイト・フェロー、マーク・フィッツパトリック氏は筆者にこんな見方を示す。

「プーチン氏の戦争は彼にとって順調に進んでおらず、ロシア国民の支持を失いつつある。プレッシャーを感じた彼は超大国であることを誇示できる唯一のツールである核兵器を利用することを思いついた。プーチン氏が核戦力を『特別警戒態勢』に移行させる命令を公にしたのは西側にシグナルを送る意図があったからだ。もし本当に核兵器を使うつもりなら公表しないはずだ。米国と北大西洋条約機構（NATO）は過剰反応しないほうが賢明だ」

フィッツパトリック氏は「過去77年間、核抑止力によって大国同士が戦争することはなかった。核兵器の相互使用の引き金となるようなミスがなかったことは世界にとって幸運だった」と振り返る。「プーチン氏の核兵器による『威嚇』は危機的な状況に陥ったとき、国家指導者がどのような誤算を犯すかを思い起こさせてくれる。核兵器とそれが使用される危険性をさらに減らすため超大国間の軍備管理協議を再開する必要がある」と指摘した。

## 政策統合レビューで核弾頭数の上限を引き上げた英国

欧州では英仏が独自の核抑止力を保有している。英国は冷戦時に最大520発の核弾頭を保有していた。冷戦後の98年には280発まで削減され、2010年には225発と初めて保有数を公表した。20年代半ばまでに180発に削減する計画だった。しかし中露が領土的野心をむき出しに始めたため、21年 3 月に発表された安全保障・国防・外交政策統合レビュー「大競争時代のグローバル・ブリテン」で核弾頭数の上限目標を260発

に引き上げた。

SIPRIによると、フランスの保有核弾頭数は現在、約290発。潜水艦発射弾道ミサイル（SLBM）と空母艦載機などの空中発射巡航ミサイル（ALCM）に割り当てられている。空母艦載機に割り当てられた10発は中央倉庫に保管され、通常は配備されていないとみられている。20年2月、エマニュエル・マクロン仏大統領は「わが国の核抑止力はわれわれの死活的利益を脅かす他の国家を阻止するためにある」との考えをあらためて示している。

米国は戦闘爆撃機による核兵器使用を考慮し、ドイツ、ベルギー、イタリア、オランダ、トルコのNATO加盟5カ国の空軍基地6カ所に約100発の核爆弾B61を配備していると推定される。米欧の核共有政策だ。ドイツは30年までに核を搭載できる戦闘攻撃機トーンードを退役させる。引き続き核攻撃任務に参加するためFA18スーパーホーネット30機を調達し、核を運搬できるよう改良することを決定したと報じられたが、独政府は否定している。米最新鋭ステルス戦闘機F35を調達する案も再浮上している。

フィッツパトリック氏は「バイデン政権発足時に米露の新戦略兵器削減条約（新START）の5年間延長で幸先のよいスタートを切った後、それ以上の進展はない。米国は他の種類の核兵器についても言及することを望んだが、ロシアには新たな協議に入る用意がなかった。追加の軍備管理見通しは暗く、ウクライナ危機で当面、不可能になった。欧州における米国の核戦力を削減する軍備管理交渉で米国がプーチン氏の顔色を見る可能性は排除できない」と語る。

## 安倍元首相「日本も核共有政策の議論を」

自民党の安倍晋三元首相は2月27日のテレビ番組で「世界の安全がどのように守られているのか。現実の議論をタブー視してはならない」と日本も欧州のような核共有政策について議論すべきだと語った。これに対し、被爆地の広島が地元で「核兵器のない世界」の実現を訴える岸田文雄首相は翌28日の参院予算委員会で「非核三原則を堅持するわが国の立場から考えて認められない」と強調した。

米国のB61の残り約130発は、東アジアを含む欧州以外の同盟国を支援するために米軍機が使用する可能性があり、米ニューメキシコ州のカートランド空軍基地で管理されている。唯一の被爆国で核アレルギーの強い日本に米国が核兵器を置くとは考えにくいだが、それも今後の中国の核政策次第だ。米英豪は昨年9

月、オーストラリアの原子力潜水艦配備に協力する安全保障パートナーシップ「AUKUS（オーカス）」を締結した。

フィッツパトリック氏は「AUKUSは中国を抑制する民主的同盟国の能力を強化し、友好国の安全保障に対する米国のコミットメントを示すものだが、核拡散防止目標にもたらす危険性に十分な注意が払われていない。オーストラリアが潜水艦で高濃縮ウランを使用することを認め、国際原子力機関（IAEA）査察官の監視から外れることは潜在的に危険な先例をつくることになる。AUKUSのもうひとつの欠点はフランスが無視されたことだ。米欧の結束を保つためにもフランスを協定に加えたほうがいい」と指摘した。

（2022年3月1日記）

